

「深い愛と熱心な教育が天才を育てた北野武の母・さき」

北野武は東京都の足立区で、父・菊次郎と母・さきの間に五男として生まれま
す。彼の本名である「武」という名前は、
竹のようにどんなものにも耐えて、すく
すく伸びてほしいとの願いを込めて命名
されました。

武の母・さきは独自の教育論を持ち、
教育を第一に考える女性でした。若い頃
から頭の回転の速い女性だった彼女は、
子どもたちの教育と成長を何よりも大切
に考え、そのためには寸暇を惜しまず手
を貸しました。

さきは子どもたちが10歳になるまでは、
毎晩欠かさず鉛筆を削り、ノートにきちん
と学習の後が記されているかを確認してい
ました。子どもたちが登校した後も、彼女
は休まず子どもを考えます。朝10時
になると、学校へ足を運び、教室の窓から
子どもたちが勉強の様子を見守っていた
というのです。それほどに彼女は教育熱心
な女性でした。こんな彼女の熱心な教育が
北野武のような奇才を育てたのです。

貧しかった北野家では、小さな裸電球の
下のみかん箱のような机で、子どもたちが
勉強をしていました。しかし、父・菊次郎
が帰ってくると電球が明るくて眠れないと
怒鳴ります。そこでさきがどうしたかと言
うと、大きな懐中電灯と塩むすびを携えて、
近所の街灯の下へ出かけていくのです。そ
こでしゃがんで本を読む子どもたちを、ず
つと懐中電灯で照らしてたというのだから
驚きです。

教育熱心だった彼女のエピソードは他に
も多く残っています。武は高校卒業後、明
治大学に入学しますが、次第に自分にしか
できないものに挑戦したいと考えるよう
になり、大学を中退します。その後の彼はお
母さんの期待をはるかに上回るような活躍
を繰り広げていくのです。武が幼少期に教
育熱心な母に教えられて蓄えた教養や考え
る力は、タレント、映画監督、作家、教授
など様々な分野にわたる活躍の礎となりま
した。母の存在があったからこそ、武の才

能が育まれたのです。

そんな母・さきですが、武が「ツイー
ト」として有名になり始めた頃から、お金
を母に納めるよう、しつこく訴えるようにな
りました。武は母も金の亡者になってしま
ったのかと半分あきれていたそうです。
しかし、後になって真実が明らかになり
ます。さきが亡くなる数か月前のことです。
武は軽井沢に母をお見舞いに行き、そ
の帰り際に姉から包みを受け取ります。さ
きからだというのです。

包みを開けた武は息を呑みました。それ
は彼名義の郵便貯金通帳と印鑑だったので
す。さきが武から小遣いとしてねだり受け
取っていたお金は一銭も使うことなく、す
べて彼のために貯金されていたのです。そ
の総額は1千万円近くにも達していたそう
です。

さきはいつても、「芸人はいつ落ち目にな
るかかわらない」と彼を案じていました。
彼の人氣がなくなっても、困らないように
と、お金を貯めておいたのです。彼はこの
包みを握りしめ、涙が止まらなかつたとい
います。

武は自ら母のことが大好きだと公言して
います。「30歳を過ぎて親を許せない奴はバ
カだ」とも言っています。自分に愛情と熱
心な教育を与えた母の影響力は彼にとって
とてつもなく大きなものだったのでしょ
う。さきが入院しているときには頻繁に病室を
訪れ、母の身を労ったといっています。

1999年8月、さきが亡くなったお通
夜の記者会見で、武は「かあちゃん……」
と絶句し、体をふるわせて涙を流しまし
た。カメラや人目をばからずに泣き崩れ
る彼の姿に、インタビュアーや視聴者もも
らい泣きせずにはいられませんでした。
いかに彼の心の中で母の存在が大きかつ
たかがよくわかる出来事でした。

このように海よりも深い愛情と熱心な教
育、心を尽くした母・さきの子育ては北野
武の心に大きな影響を与え、類まれなる才
能を育てたのです。

「偉人を育てた母の言葉」
致知出版社
大坪信之（コベル代表取締役社長）

「やっちゃん」の詩が 教えてくれるもの

忘れられない詩がある。
15歳の重度脳性マヒの少年が、その短い
生涯の中でたった一篇、命を絞るようにし
て書き残した詩である。

ごめんさいね おかあさん
ごめんさいね おかあさん
ぼくが生まれて ごめんさい
ぼくを背負う かあさんの
細いうなじに ぼくはいう
ぼくさえ 生まれなかつたら
かあさんの しらがもなかつたらうね
大きくなつた このぼくを
背負って歩く 悲しさも
「かたわな子だね」とふりかえる
つめたい視線に 泣くことも
ぼくさえ 生まれなかつたら

ありがとう おかあさん
ありがとう おかあさん
おかあさんが いるかぎり
ぼくは生きていくのです
脳性マヒを 生きていく
やさしさこそが 大切に
悲しさこそが 美しい
そんな 人の生き方を
教えてくれた おかあさん
おかあさん
あなたがそこに いるかぎり

『致知』2002年9月号で
向野幾世さんが紹介した詩である。
作者は山田康文くん。生まれた時から全身
が不自由、口も利けない。通称「やっちゃん」
そのやっちゃんを養護学校の先生であつ
た向野さんが抱きしめ、彼の言葉を全身で
聞く。向野さんがいう言葉がやっちゃんの
いい言葉だつたら、やっちゃんがウイ
ソクでイエスのサイン。ノーの時は舌を出
す。気の遠くなるような作業を経て、この
詩は生まれた。そしてその2か月後、少年
は亡くなった。

自分を生み育ててくれた母親に報いたい。
その思いがこの少年の人生のテーマだつた
といえる。短い生涯ながら少年は見事にそ
のテーマを生ききり、それを一篇の詩に結
晶させて、逝つた。生前、ひと言の言葉も
発し得なかつた少年が、生涯を懸けてうた
いあげた命の絶唱。

この詩が私たちに突きつけてくるものは
重い。人は皆、一個の天真を宿してこの世
に生まれてくる、という。その一個の天真
を深く掘り下げ、高め、仕上げていくこと
こそ、各人が果たすべき人生のテーマとい
えるのではないか。

『致知』2004年1月号
特集「人生のテーマ」より

このお話からあなたは何を受け取り、何
を思いましたか。それぞれの人生のテーマ
の根源に命の意味をしつかり刻みましょ
う。

「計り知れない苦労を思う」
韓国で1400万人以上を動員した大ヒ
ット映画「国際市場で逢いましょ」(日本
では5月16日公開)を見た。朝鮮戦争で父
親と幼い妹と離ればなれになってしまった
男の子の一生を描いた作品である。父親と
交わした約束は、家族を守ること。幼いな
がらに父親になりかわり、残された母親と
弟妹を守るために必死で生き抜いた。海外
に出稼ぎに行つたりしながら、ひたすら、
家族のためにと懸命に働き続けた。自分の
夢をかなえることよりも、家族のために命
をかけて。

映画を見終えた後、私は亡き父に思いを
はせた。父は学生時代に弟と父親を相次い
で亡くした。母親は小学校の教諭であつた
ものの、遣された家族を養うには女手一つ
では苦しく、父は家計を助けるために、勉
学に励みながら実家の農業を営み続けたそ
うだ。本当は医者を目指していたが、途中
で獣医に変更したという。そんな父の背景
にもまた、家族のために生き抜いた人生が
確かにある。

映画は私たちに語りかけてくる。父の、
母の、またその上の世代の人たちの人生を

知っていますか？と。世の中のすべてのシ
ニアの人たちの人生には、それぞれの計り
知れない苦労があつて、言葉では言い表せ
ない人生があつて、今を、そして、私たち
をあたたく育んでくれている。今がある
のは、シニア世代のおかげだ。だからこそ、
今後ますます、すべてのシニアの方々に心
から感謝し、敬意を払い、コミュニケーション
（日経MJシニアおもてなしスケッチ）
接客アドバイザー キーワード 北山節子）

編集後記



皆様へ支えられ、お陰様で2010年7
月の創刊以来丸5年、ひらほく新聞が第60
号を迎えました。創刊当時のクイズなど子
どもさん向けの内容から現在のようになり、「心
にサブリ」系？になり、有難い反響もいた
だくようになりました。続けてきた甲斐が
あつたと、たいへんに嬉しく思います。
今後ともよろしく願っています。

さて、先月、個人的に非常にやつかいな
出来事に遭遇しました。「全ての出来事には
必ず意味がある」と常々心掛けてきた「つ
もり」の自分……、しばらくの間、受け入れ
られず、立ち直れませんでした。
いつまでも考えてもしょうがないと、何
とか平成に戻つた折り、自分のSNS投稿
にとても元気が出たとの書きこみ。書かれ
たSさんは、3年前のある講演会で出会つ
た方で、重病で何度も手術を受けてずっと
入院の繰り返し、現在入院中とのこと。
自分は五体満足、十分に幸せなのに当た
り前に感謝できず、何を悩んでいたのか……
と情けなくなりました。すぐに連絡を取り、
自分出来ることとして、ミニコミやら取
り貯めた感動CDなど、思いを込めてお送
りしました。思いは必ず届く、伝わりと信
じて、心より回復をお祈りしました。

同じ時期に、友人の親戚の方が交通事故
で亡くなったという訃報も。時間「いのち」
誰もが明日も変わりなく生きていくという
保証はどこにもありません。ならば、目の
前の「今」にとかく全力で向き合うこと。
そして、「何のために」を明確に。(山本)